

Title	アンドレ・ジャコブ氏を迎えて： 三田哲学講演会,A.ジャコブ氏「時間の問題性」の原稿翻訳と講演会報告
Sub Title	Professor Andre Jacob as guest speaker of Mita-Tetsugaku-kai : translation of "La problematique du temps" with his short profile
Author	河野, 哲也(Kono, Tetsuya)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1994
Jtitle	哲學 No.97 (1994. 7) ,p.1- 12
JaLC DOI	
Abstract	Here is a translation of Professor Andre Jacob's lecture, "La problematique du temps", given on October 13th 1993 at Mita-Tetsugaku-kai (Mita Association for philosophy), with his academic profile. Mr. Andre Jacob is ememitus professor at University of Paris X and editor of EncycloPédie philosophique universelle (P.U.F.). He has published many philosophical books and papers on the problem of language, time and ethics. This lecture was the problem of time. After making the general survey of the concept of time, he discussed the special feature of 'human time' and its close relationship with language and otherness. He also stressed the practical and creative aspect of 'human time' in our life. He responded to questions from the audience and the lecture ended in great success.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000097-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アンドレ・ジャコブ氏を迎えて

—三田哲学講演会, A. ジャコブ氏「時間の問題性」
の原稿翻訳と講演会報告—

河 野 哲 也*

**Professor André Jacob as Guest Speaker of
Mita-Tetsugaku-kai**

—Translation of “La problematique du temps”
with his Short Profile—

Tetsuya Kono

Here is a translation of Professor André Jacob's lecture, “La problematique du temps”, given on October 13th 1993 at Mita-Tetsugaku-kai (Mita Association for philosophy), with his academic profile.

Mr. André Jacob is ememitus professor at University of Paris X and editor of *Encyclopédie philosophique universelle* (P.U.F.). He has published many philosophical books and papers on the problem of language, time and ethics. This lecture was the problem of time. After making the general survey of the concept of time, he discussed the special feature of ‘human time’ and its close relationship with language and otherness. He also stressed the practical and creative aspect of ‘human time’ in our life. He responded to questions from the audience and the lecture ended in great success.

* 慶應義塾大学経済学部非常勤講師 (哲学)

アンドレ・ジャコブ氏を迎えて

1993年10月13日(水)の三田哲学講演会は、パリ第10大学名誉教授、アンドレ・ジャコブ(André Jacob)氏を招き、「時間の問題性(La Problématique du temps)」という演題で講演を行なって頂いた。以下に、ジャコブ氏のプロフィールと講演会当日の様子を簡単に報告した後、講演原稿の翻訳を紹介する。なお、この講演原稿はジャコブ氏の許可を得て報告者の責任で訳出したものである。

アンドレ・ジャコブ氏のプロフィールと講演会報告

アンドレ・ジャコブ氏は、1921年にパリで生まれ、1947年に哲学の教授資格さらに1967年に哲学博士号を取得し、パリ大学で哲学の教鞭を執られ、現在もパリ第10大学の名誉教授として活躍しておられる。また、1989年にフランス大学出版(Presss Universitaires de France)から出版された『哲学大辞典(*L'Encyclopédie philosophique universelle*)⁽¹⁾』の監修者でもある。

ジャコブ氏の研究領域が多岐にわたっていることは、末尾に紹介する彼の主要著作表を見れば明らかであるが⁽²⁾、彼の一つの基本的な哲学的立場を示すものとして構成主義的ないし発生論的構造主義が指摘できるであろう。ジャコブ氏は、講演前日の我々との打ち合わせの際、彼が影響を受けた思想家として、構造主義の先駆となる哲学者ガストン・バシュラール(Gaston Bachelard)、発生的認識論を唱えたジャン・ピアジェ(Jean Piaget)、独自の構造言語学を展開したギュスターフ・ギョーム(Gustav Guillaume)などの名前をあげ、古典的な哲学よりもむしろこうした現代の言語学や心理学、認識論との対話から自分の哲学を形成していったと語られた。発生論的構造主義の立場は、広い意味での構造主義の流れに属しながらも、構造を動的で可変的なものとして捉える点において、人間主体を静態的構造により説明しようとする所謂「構造主義」と大きく異なっている。こうした言語や認識論的問題への関心に加えて、彼は道徳や時間についても多くの著作、論文を表している。

本講演においてジャコブ氏は、演題にあるように「時間」について論じ、時間概念の一般的見取り図を示しながら、「人間的時間」の特殊性とその言語や他者性との関係について興味深い理論を展開された。限られた時間での講演だったゆえに、以下で紹介する講演要旨は彼の時間論の骨子しか伝えていないが、さらに詳しくは *Temps et langage* の 1992 年に出版された第二版⁽³⁾を参照することを薦めたい。

さて、今回は、国際交流基金によって来日したジャコブ氏を、アラン・ロベール・クーロン (Alain Robert Coulon) 氏 (国際協力事業団フランス語講師) の紹介で、三田哲学講演会にお招きするかたちとなった。慶應義塾側では、成田和信氏 (商学部) と鈴木順二氏 (商学部) が世話人となられた⁽⁴⁾。当日は、成田氏が講演の司会をつとめられ、鈴木氏に加えて、クーロン氏と報告者で通訳を担当した。講演は、ほぼ満席となった三田の大学院棟 333 番教室で、予定どおり午後 4 時半に始まった。長旅の疲れも見せないジャコブ氏は熱弁をふるわれ、その後の会場からの質問にも丁寧に返答された。気がつけば終了予定時間を小一時間も過ぎるほどの大成功の講演会であった。参加者を代表して、すばらしい講演を行なって頂いたジャコブ氏に感謝の意を表したい。

『時間の問題性 (La Problématique du temps)』⁽⁵⁾

アンドレ・ジャコブ (André Jacob)

その多様性、その手強さ、そのいろいろな相関関係を考慮すると、時間性という主題は、それが先鋭化 (radicalité) してしまう故に、最もつかむのが難しいもののように思われる。その先鋭化は、経験の全くの科学的客観化によってと同時に、人間意識の極端な主観化によってもたらされる (impliquée)。どちらの場合においても人は、諸本質の形而上学、やはり永遠と一致する先験性 (priorité) を表す (expressive) 諸本質の形而上学のような神学から遠ざかるように思われる。そして、そのように人が形而上

学から遠ざかるのは、一方〔時間の科学的客観化〕においては、空間性との相関関係に同意しながらであり、反対に他方、人が実存の哲学を目指す時には、おそらくは誤って時間性と空間性との相関を拒否しながらである。

我々ははっきりと発生論的で構成主義的な目論見を持つことで、「実体主義的」な（精神と物質の二元論のような）二元論に抵抗し続けながら、以下のことを認めるのである。

1. 永遠に対して時間性を全く従属させることは、形而上学が終了した我々の時代にあっては、効力のない言説を生じさせる危険がある。それは、なによりも始原的〔な事実〕である全ての現実の時間的挿入 (insertion)〔全ての現実には時間が付着しているという事実〕を無時間性の幻想のうちに逃れさせてしまうのである。

2. 意識の哲学—特にフランスの意識の哲学の凋落において、人間存在は、生きている有機体あるいは宇宙的エネルギーに負けず劣らず空間性に結びつけられている。

以上のことは、それにしたがって他者を再構成するような人間的時間を正当性なものとして検討する前に、共通経験から科学的理論化にいたるまでの時間性一般に関する諸特徴について検討するように我々に求めている。だからといって、その（理論的）——概して言語学的な——可能性の諸条件は、我々の人生を意義あるものに実現しようとする終わりのない (inachevable) 要請であるような、その〔時間の〕働きつつある（実践的で創造的な）諸々の含意 (implication) を排除するものであってはならない。

I. 時間性概念の一般性

もし、ある生成というものを仮定しながら、時間性の概念が複雑化するに応じてそれ〔時間性の概念〕を非一多様化 (démultiplie) してしまうことが正しいならば、時間性「一般」〔なるもの〕はなにも意味しない抽象となる危険性がある。ヘラクレイトスやヘーゲルを超えて、存在と無の畏の

裏をかくことが、唯一、我々の認識と行動の目的 (visée) を保証してくれるのである。

A. 経験と表象

もし、ピアジェ派の精神発達の説明の枠組みにおいて〔言われるような意味で〕、全てのものが経験からはじまるとするならば（その経験が、たとえ、疎外されたものであれ）、人間は、——過ぎ去るか、あるいは流れ去る——時間の経験を全ての表象や概念化の手前で獲得することになる。とすれば、以下のことが言えるのである。

1. 表象〔再—現前〕は、時間を問題化するにあたって次のような点で重要なものである。

a/ 現在からの距離設定 (distantiation). これなくしては時間の延長性〔ひろがり〕は存在しない;

b/ 次の章で述べる基本的な探求を正当化するような、言語や文化と関わった時間の表象;

c/ 時間が空間的に表象されざるを得ないこと。それは時間と空間の多元的な連帯を意味している。

2. 〔時間概念の〕「規範的=古典的 (canonique)」諸形態は、循環的なものと直線的なものに対応している (correspondre). 前者は、自然への古代的な関係（例えば昼と夜の交代）であり、他方、後者は、場合によっては自然的な変化を乗り越える（電気の光と夜）ことのできる、技術と結びついた進歩的な関係である。しかし、第三のモデルの探求がないわけではない。H. Barreau は、時間概念の構成についての大著〔学位論文〕の著者であるが、彼はストラスブルク会議での報告の時に、「分岐した」時間概念を現代科学の諸成果に対応させて論じた。彼の議論は、私もその会議で、その名に値する以下の議論の構造化するものとして「円錐—ベクトル」モデル（この概念は二部の発想の基本にある）を提案したのだが、その前に行なわれたものである。

アンドレ・ジャコブ氏を迎えて

3. 諸神話と諸文化を超えて、プラトン、アリストテレスからベルクソンやハイデガーにいたる西洋の哲学者は、多かれ少なかれニュートンからアインシュタインへいたる近代科学の到来と結びつけられた諸分析に没頭してきた。そうした分析は、特に継続 (succession), 持続 (durée), 同時性 (simultanéité) を区別しながら行なわれてきたのである。ところで、相対性理論は、その空間との繋がりにおいて、時間の根本的見直し (radicalisation) を導き出したのであるが、このことは、この〔同時性の〕概念—「時間の中の存在」を否定する上空飛行のしるしである「特権的観察所」を想定する概念—の絶対化を批判することからはじまったのである。しかし、時間が無視しえないものであると認められたのは、間違いなく、ボーアからハイゼンベルクによる「決定論的」科学から手をひく態度—これはプリゴジンのような仕事によって引き継がれたのであるが—のうちにあったのである。

B. 認識論の射程

上で述べた〔現代物理学の〕これらの仕事の決定的な特徴は、以下の幾つかの要因に起因している。

1. 古典力学から受け継いだ図式を維持しながら、時間の不可逆性に対する熱力学の寄与を無効化しようとする、そういう立場に対抗したこと。

2. 均衡の理論よりさらに放散構造の理論によって、ネグントロピーの複雑化の局部的 (locales) 進行とエントロピーによって課された全体的な反対方向への進行を両立可能なものとする事。

3. 発生的で出来事的 (événemetille) であるがゆえに、A. コントにおいては支配的であった一般的諸法則の認識論が時代遅れのものに思えるような一つの科学を導入すること。構造化なき構造はもはやありえないということは、伝統的な「永遠主義」に十分に対抗するものであり、従って、1988年に書かれた (I. Stengers との共働)「時間と永遠のあいだ」と題された著作の中で、1977年のノーベル化学賞受賞者〔プリゴジン〕は、なん

と、永遠性を時の矢と同一視しているのである。秩序と反秩序——騒音、カオス——は、もはや隔絶したものではありえない。膨脹する宇宙は、エネルギーと情報によって構成された時空間を許容する（＝資格を与える＝habiliter）ものなのである。

しかし、人間の生物学的な先形成 (préfigurations) は、自己組織化を伴っており、人が認めがちな共時態に対する通時態の優位に制限をあたえる。私の「人間—論理の学 (anthropo-logique) 的」研究が、私の学位論文『時間と言語』を超えて、人間的時間性の特殊性を擁護するように私を導くのは、まさしく、この二つの次元〔共時態と通時態〕の間の分節化することによってである。そして、この二つの次元は、『一般言語学講義』においてソシュールによって提案された言語学的方法を大きく超え出るものである。

II. 人間的時間の特殊性

時間について語り始める以前に、我々は既に、E. バンヴェニストが指摘する「言説の審級 (l'instance de discours)」の下層にある「操作的共時態 (synchronie opérative)」から生じる時間的組織化を受け入れているのだが、この受け入れは、実際疑いもなく、ある母語を身に付けることによって行なわれるのである。

A. 人間的時間の条件

人間が単に語る主体となるだけではなく、全き主体（＝Su-jet [上に—投げる]）、すなわち言説と行動を結び付ける力 (puissance) となるのは、言説を開くことを可能にする言語的潜在性の観点のもとに〔主体を捉えることによって〕なのである。と言うのも、主体（＝Su-jet）となることで、人間は、生成のうちに永久に捕われ (prendre) の身となるかわりに、生成を分析しうるようになるし、そうして、それ〔生成〕を理解する（＝共に捉え合う＝com-predre）ようになるからである。もし、主体（＝Su-jet）と

なることが我々の生成への従属に制限を加えるのならば、そのことは我々の時間への関係を否定するどころではなく、それを創設するものである。人間が、さまざまな母語のグループに書き込まれている三分割〔現在・過去・未来〕に結びついた一般的時間性を受け入れるのは、人間が自らを主体 (=Su-jet) として自己構造化することにおいてである。——しかし、その三分割は、現実的なものと潜在的なものとの対立に置き換えうる。より正確に言えば、主体 (=Su-jet) を構成する瞬間は、時間的 (記憶的, あるいは予見的) 目的 (visée) ばかりにではなく、時間化の諸過程 (* 末尾表参照) にもよりどころを与えるのである。円錐とベクトルによって描かれる二重性は、一方で全ての母語に内属している普遍性と個別性のあいだの緊張を意味し、——それは特殊な個別性に普遍性について語られるように定められている——他方それは、この組織化の力をよりどころとする諸決定を意味する。この理論的な対〔円錐とベクトル〕は、その生産的解放性において、すべての「堂々巡り=自己内閉性」を助長する心理—社会的閉鎖性に対立する。

このようなわけで、人間的時間は、その設計図を他者性のうちに見いだすのだが、それは、次のような記号論的三身一体の庇護の下においてなのである。〔その記号論的三身一体とは〕すなわち、私 (一人称) は、何かについて (三人称), 誰かに話す (二人称)。これは、多かれ少なかれ「自己中心的 (pleines de soi)」な自我の主観化を含んでいないような倫理的解放性の条件 (Bを参照) である。

もしも、これらの条件において、人間的時間の展開が物理学の時間の客観化を許すならば、それは、可能なものの出現が現実的なものの許容を可能にするかぎりにおいてである。それは特に、時間性と外延を等しくする主体 (=Su-jet), あるいはむしろ、時間性がはじまる瞬間と外延を等しくする〔同じく始まる〕主体 (=Su-jet) が、その批判的諸含意と共に、仮一定 (説) 的 (hypo-thétique) 次元を保証するということであり、言うなら

ば、それは、人が乗り越えることを諦めてしまうような過去を特権化する独断的定立 (thétique) の次元を保証するのものではもはやないのである。言語 (言語学者 G. Guillaume が言うところの全ての科学以前の科学) から科学に到るまで、主体 (=Su-jet) は世界を押しつけるのではなく、仮定し、吟味し、維持するのである。母語に内属している分析 (ana-lyse) を強化しながらの〔生成からの〕退却は、生成から「引き離れる〔=離陸する〕(décoller)」ことなく、生成を分析しながら、それを過去と未来のうちに分離し、時間化の展開を利用してそれを上から眺める人間的主体 (=Su-jet [上に一投げる]) の力を確固たるものにするのである。

B. 人間的時間の実践的重要性

時間のこの理論的側面は、瞬間における〔時間化という〕組織化の力に結びついており、それが非時間的な何物かに関わっていると信じていることができたなら、一層、その力は隠蔽されることになってしまう。だが、そうした時間の理論的側面に直面してさえ、時間の実践的で創造的な構成要素はその権利を失うことはないであろう。実際、もし、時間が宇宙の隅々まで行き渡っている生成であるならば、時間性は、常にまずは人間的経験の導きの糸として現われるであろう。人が死を避けることができないと思えば思うほど、時間的実存〔である人間〕は、或る意味を獲得しようとしてより努めるのである。言い換えるなら、人は時間の倫理に向かうのである。人間にとって「時間を引き受けること」、それを失わないこと、が重要であるのは、宇宙的な生成から強く区別される次元においてであり、そうした条件においてなのである。しかしながら、それは、無思慮な仕方で「時間を稼ぎ」、18世紀以来、成長し、美化ばかりされてきた「時は金なり」という考えに譲歩することなく行なわれなくてはならない。

同様に侵略してくる公共的時間に向かい合って——消費社会からマス・メディアへと、その抗いがたい内容を通して——、個人は、数多くの諸拘束を弛める予測=気遣い (Prévenir) の枠内で、諸選択をおこないながら、

自らを把握し直さなくてはならないのである。さらに、他者への関係のうち根を下ろしながら、人間的時間は、懇親性や気遣い (Prévenance)に方向を換えていくのである。

結 論

1. より原初的な生きることからより抽象的な理論化まで、どこにでも現われる時間の観念は、前者を支え、後者を基づける人間学的な〔時間の〕組織化の根源的な復権を訴える。人間主体のこの上ない構成要素である言語的諸構造と諸操作は、〔以下の〕時間の二重の相対性を支える。それは諸々の文化に応じて時間を単一化する相対性であり、アインシュタインに従って〔言えば〕、同時性の現象をつかむことができるような単一の枠組みに反対するそれ〔相対性〕である。

2. このように、時の矢によって表されるような生成の不可逆性に基づいて、人は、〔事物の〕時間的変遷と時間的多数化を認めなければならなくなる。生物学的段階の後に、主観化と客観化を徹底すればするほどに、人間的段階は決定的なものとなり、それは物質的あるいは精神的領域についての〔時間の〕空間などとの関係あるいは対立についての偏見や誤解の源となってきた。

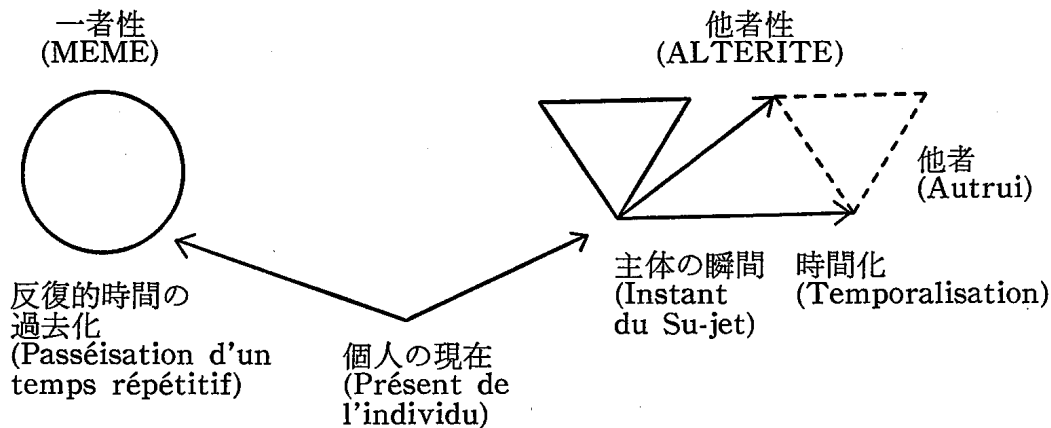
3. 最後に、空間同様、時間はエネルギーと情報に依存しているのであるから、受動性と「なすがまま」の運命から我々の身を守りながら、そこでなすこと (un faire)を再把握することは重要である。それは、死の——そしてそれが引き起こす感情の——介入にも関わらず、時間の方向性は、意味の到来のための条件なのである。他者への関係という含意が、人間に一貫性と意義を与えるのは、人間的時間の言語的・伝達的基礎の証に他ならないのである。時間の諸理論、〔例えば、〕極東やギリシャのもののような古代の諸理論でさえ無効にすることなく、適応した力の諸々の方向性は、現に行なわれている間文化的探求のうちでのみ現われうるものであり、現代

の哲学的理論化はそれ〔間文化的探求〕を必要としているのである。

参 考 文 献

- UNESCO: *Le temps et les philosophies*, Introduction de P. Ricœur, 1978.
 I. PRIGOGINE et I. STENGERS, *Entre le temps et l'éternité*, 1988.
 G. GUILLAUME, *Temps et verbe*, 1929 (2ème éd. 1965).
 A. JACOB, *Temps et langage*, 1967 (2ème éd. 1992).
 E. LEVINAS, *Le temps et l'autre*, 1948 (2ème éd. 1979).

(*) 人間的時間の図式化



訳 注

- (1) *Encyclopédie philosophique universelle*, publié sous la direction d'André Jacob, Paris: Press Universitaire de France, 1989.
- (2) ジャコブ氏の主要な著作は以下のようなものである。なお、この表はジャコブ氏自身の業績表に基づいている。
- Temps et langage*. A. Colin, 1967, 2éd., 1992.
- Points du vue sur le langage* (Introduction et 270 textes choisis avec bibliographie). Klincksieck, 1969.
- Les Exigences théorique de la linguistique selon G. Guillaume*. Klincksieck, 1972.
- Génèse de la pensée linguistique* (avec la collaboration de P. Caussat et R. Nadeau: Introduction, 21 textes de Leibniz à Chomesky et bibliographie). A. Colin, 1973.
- Introduction à la philosophie du langage*. Gallimard, 1970.

アンドレ・ジャコブ氏を迎えて

Cheminevements: De la dialectique à l'étiqne, Anthoropos, 1982.

Anthropologie du langage: Constructivité et symbolisation. Bruxelles: Mardagas, 1990.

(3) *Temps et langage*. A. Colin, 1967, 2éd., 1992.

(4) この事情をもう少し詳細に言うならば、本講演は、クーロン氏が、今回のジャコブ氏の来日を本塾の鈴木氏に紹介することで成立した。クーロン氏はソボンヌ大学で東洋哲学に関して文学博士を修められ、東京大学に留学、日本の大学の講師を歴任された後、現在、国際協力事業団フランス語講師として活躍しておられる。彼は、*L'Encyclopédie philosophique universelle* の日本の哲学に関する翻訳を担当し、この仕事を通じてジャコブ氏と知り合いになられたと聞いている。

(5) 冒頭でも述べたように、この翻訳は、ジャコブ氏が事前に送ってくれた今回の講演原稿の翻訳であり、当日の発表もこの原稿にほぼ忠実に行なわれた。また、この翻訳を作成するに当たって協力をいただいた成田氏、鈴木氏、クーロン氏（特に、クーロン氏には翻訳の多くの点で適切な指導を頂いた）に、そしてなにより、翻訳の当『哲学』への掲載を快諾頂いたジャコブ氏にこの場を借りて謝意を表したい。翻訳中のパーレンの中の文章は、著者ジャコブ氏によるものであり、キッコーのなかの文章は訳者による補足である。